

前回までのあらすじ

流遠るとおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があつて、友達がいいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまふ。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゅう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思つていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘たちばなアサト、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまふ。

あたかも、改変された世界から排除されるように……。

MBデバイスとの契約を無事に終えたクラウは、ロゼットの提案により、愛機を〈ラインハイト〉と名付ける——純粹・無垢という意味を込めて。

その後、談話室でアサトに頭を撫なでられるという機会を得たカナコは、彼に対してこれまで以上に特別な『なにか』を感じる。だが、カナコがそれを伝えようとした矢先、クラウの検査から戻ったロゼット達によって、タイミングを逃してしまふ。

そんなロゼットから告げられた言葉は、〈プレケース〉が各地で一斉に撤退を始めたらしい——というものだった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

親が死んでも腹は減る。

人間、心配事やシロツクな事があると食事が喉のどを通らなくなったりもするが、生命活動を行っている以上はエネルギーの補給はせざるを得ない。

同じように、非常事態であっても経済活動を行わなければ収入が得られないし、食料の供給や生活基盤インフラが止まってしまえば、多くの人間の死に直結する。高度な文明による社会システムは便利な反面、維持し続けなければいけないという危うさも孕はらんでいる。

自分の暮らす日本もそうだし、別の惑星であるゼーナも同じなのだろうと、アサトは街並みを眺めながら思った。

此处ここ、東方大陸は日本の文化の影響を色濃く受けているらしく、別の星という感覚はない。建造物の様式は見慣れたもので、通行人の人種もほぼアジア系が占めている。

国内の知らない場所——転移して来たという認識があっても、その程度の差異しか感じない。

「……………」

気になった点があるとすれば、街並みの割りに通行人の姿が少なく感じられる事と、営業していない店がちらほらと目につく事だろう。

「このエリアは今日、避難命令が解除されたばかりですから、まだ平常運転とはいかないようです。この時間帯であれば、普段は平日でももう少し人通りがあるものですが」

アサトの内心を読んだかのように、隣を歩いていた長い黒髪の少女が言った。

美少女。

好みの違いこそあれ、そう呼んでも誰からも文句は出ないだろう、綺麗な少女である。

カナコ・T・シングウジ。

アサトより一つ年下の十七歳で、学年も一つ下の高校二年生だと聞いている。

『カナコ』だったら、年齢が合わないんだよね……」

アサトには行方不明になった妹がいる。

橘たちばな カナコ。失踪した当時十二歳なので、生きていけば十五歳になっているはずだ。

自分と同じように転移現象に巻き込まれたのなら、彼女はひよっとして——そうアサトが考えるのは当然だろう。

「シングウジさん——」

『カナコ』と呼んでください——と、お願いしました」

アサトの言葉を最後まで聞かず、こちらを見上げるカナコは不服そうに言った。表情こそ真顔のままだが、口調は明らかに不満が滲にじんでいた。もしかしたら拗すねているのかもしれない。

昨日、クラウのMBデバイス起動試験が終わり、とりあえず解散となった直後、アサトはカナコに呼び止められた。その際に言われたのが『ファーストネーム』で呼んでほしいというものだった。苦手意識こそないが、アサトも思春期の男子なので、同年代の女子を名前で呼ぶのには抵抗というか勇気が要る。なので、理由を訊ねて体よく断ろうとして、しかし出来なかった。カナコあの表情を見てしまえば、理由を訊く事すら躊躇われる。昨日の暴走したクラウとの激戦でも見せなかった、必死——いや、勇気をふりしぼったのだろうと思える表情だったから。

「あー……カナコ」

「はい。何ですか、橘さん」

一転してカナコの表情が穏やかなものになる。微笑といった程度の笑みなのだが、彼女は無表情である事が多いのはすでに理解しているので、それでも極上の笑顔に感じられる。あるいは本当に美少女だからこそ、微笑くらいで充分なのかもしれない。

(まさかな……)

カナコに妹の面影を感じる。綺麗な黒髪で、可愛い顔つきだったので、成長すれば彼女のように美しくなっているだろう。だが、当時の妹は内気な性格で、目の前にいる静謐だが毅然とした少女とは印象が合致しない。(機獣少女のように戦えるとは思えない。)

それはあくまで、アサトの知っている頃の妹であればだが。

「……この辺は、よく来るのか？」

本当は、家族や生い立ちについて訊こうとして、出来なかった。カナコが妹であるはずがないと思いつつ、ひよつとしたらという期待がある。だから、違うと判明してしまう事への恐怖が、アサトに質問内容を変えさせた。

「……………。はい、ほとんど買物はこの辺りで済ませています」

内容は判らずとも、アサトが最初に考えていたのとは違う質問をしたと気付いたのだろう。カナコは複雑な表情を浮かべたが、すぐに気を取り直すように、そう答えた。

「昨日まで誰もいなかった事を思えば、半日でこれだけの店が営業を再開して、人が集まっているのを見ると、人間のしぶとさを実感します」

「生きていかなきゃなんないからな。それぞれが当たり前の事をしてるだけなんだろうが——」

そういった意欲や前向きさ、生きる事への執着が薄いアサトは、自分の発言が嫌になった。そんな『当たり前』に、自分は当てはまらない。

「——私も……」

「ん？」

眩こぼやくようなカナコの声音こわねに、アサトが耳を疑う。彼女は口数こそ多くないが、言うべき事ははっきりと言う印象だった。

「私もこの光景を見て不思議に感じます。どうして、そんなに必死になってまで生きようとするのか……」

また思っている事を読まれた。

それ以上に、カナコが自分と同じような感覚の持ち主である事に驚いた。《機獣少女》とは、《カタストロ》の脅威から人々の平和と財産を護る存在だと、ツバキからは聞いていた。誰もが純粋な正義感を持っているとは思わないし、当のツバキがそんな風には見えなかった。真面目で優しい子だが、正義感で動くタイプではないと思う。

カナコもまた、そうなのだろう。

だとすれば、《機獣少女》という仕事にも思うところはあはずだ。人を護るために戦っているのに、生きる事に疑問を感じるという、ある種の矛盾。

「……………」

「やめましょうか。せつかく 橘たちばなさんに街を案内しているのに、こんな話」

苦笑を浮かべるカナコの表情を見てしまうと、何も言えなくなる。何か言うべきなのだろうが、上手い言葉が見つからず、アサトは同じように苦笑を返すのでやっとだった。

生物には生きようとする本能がある。

アサトもカナコも、それが他人ひとに比べて希薄なだけだと、自分を納得させるしかないのだ。

「——ツバキ？」

ふと、もう一人の連れが会話に加わらない事に気付く、アサトは彼女の名前を呼んだ。

「……………」

並んで歩いていたアサトとカナコの、すぐ後方にいた少女が、呼ばれて気付いたといった反応をした。恐らく、これまでの二人の会話は耳に入っていなかっただろう。それはそれで、アサトとしては構わなかったが。

「——あ、はい。何ですか？」

普段通りの澄まし顔で、年齢に不釣り合いな落ち着いた雰囲気まじを纏った少女が言う。セミロングの黒髪をサイドポニーにした、可愛らしい容姿である。

ツバキ・タカチホ。

小学五年生だが、彼女くらいの年齢の《機獣少女》は珍しくないらしい。

それでも、ツバキほど大人びた精神性メンタルテイの持ち主は稀まれだろう。

「……………」

『いつも通りですよ?』といった風を装うツバキに、アサトは言葉に詰まる。今日の彼女はずっとこんな調子で、どこか心此処にあらざといった様子だった。その理由もアサト達は判っている。

「タオエン達の事が気になるのね」

「……………はい」

見透かされている——そう判断したのだろう。カナコの言葉に、ツバキは取り繕うのをやめ、頷いた。

「なんだか、こうしているのが申し訳なくて……」

「そうね……」

この場にいない者達に想いを馳せるツバキとカナコ。

その様子を、アサトはただ見守る事しか出来ずにいた。

第二十四話

『アラシノマエノ』

〈ジェネレーター〉が存在する場所——つまり、惑星ゼヘナの人口密集地ほぼ全域に現れた〈プレケース〉が、各地で撤退を始めた。

ロゼットからもたらされた報に、談話室で待機していたやみひめ達は戸惑った。確かに、ロゼットが前置きしたように朗報だろう。自分達の脅威がいなくなるうとしているのだから。だが、今日地球から来たメンバーにとつては対面すらしていない相手で、それ以外の者達も、なぜか喜べるような気持ちになれずにいた。

「……あれ？ 朗報だよね？」

リアクションが薄い一堂に対し、ロゼットもまた戸惑いの表情を浮かべた。

ロゼット・コダール。

長い金髪と青い瞳の美女で、穏やかな物腰からは想像しにくいが、此処へL. C. ファクトリー〉の最高責任者であり、自身も高名な技術者である。

「じゃあ、もう戦わなくていいんだよね？ それならその方がいいんだけど、なんていうか……うくん」

長い黒髪をポニーテールにした少女が、自分の感情をどう表現していいのか判らない様子で首を傾げた。

流遠るとおやみひめ。

十二歳の小学六年生で、地球から来た〈機獣少女〉。

「やみ子の言いたい事は判る。不謹慎な喩えかもしれないが、ゲームの基本説明が終わって、これから世界を救おうと思つたら平和になつたようなもんだろ」

そう言うのは、この場で唯一の男性である橘たちばなアサトだ。まだ高校三年生の少年だが、明らかに元気や覇気といった言葉が似合わない。

アサトの喩えに、ロゼットと共に談話室にやってきたクラウドは苦笑してくれたが、地球ともゼヘナとも違う世界の住人であるベアトリーチェとタオエンだけははてな顔だった。彼女等にはテレビゲームのような概念はないのかもしれない。

「確かに拍子抜けではあるわね。それ、確かな情報なの？」

「うん。ミズキから連絡があつて、各地からそういう報告が来てるそうだよ。カナコとツバキにも伝えておいてつて」

カナコの問いに、ロゼットはそう答えた。

「ミズキって？」

「私とカナコさんが所属している事務所の方で、カナコさんのご友人です」
やみひめとツバキの会話を背中中で聞きつつ、カナコはこの場でもっとも〈プレケース〉について知っているメンバーに水を向けた。

「あなた達はどう思う？ 〈ブレケース〉は目的を達成せずに撤退するものなの？」

人間であれば、目的達成が不可能、もしくは困難だと判断すれば撤退する。それをしない、出来ない場合もあるが、合理的な判断とは言えない。〈カタストロ〉の場合も同様で、やはり形勢不利となれば逃げだす。この場合は『死にたくない』という、生物の本能的な判断だろうが。

「我々も目撃した事は数回しかありませんが、撤退した例はないですね」

「誰かの願いを叶えるのが存在理由だから、それを途中で放棄するのは、〈ブレケース〉にとっては死ぬのと変わらないんじゃないかなあ」

姉のタオエンが答え、妹のベアトリーチェも同様の考えのようだ。

この二人は姉妹らしいが、容姿も性格もまるで似ていない。

タオエン・ファフロウは銀色のセミロング。狐きつねのような耳と尻尾を備えた十六歳で、綺麗だが取っつきにくい印象がある。

ベアトリーチェ・ファフロウは茶色のショートヘア。猫のような耳と尻尾を備えた十三歳で、可愛らしく人懐っこい。

彼女等は〈エグゼキューター〉という存在らしく、〈機獣少女〉とは違う技術体系による力を持っている。長女である姉を追って旅をしており、〈ブレケース〉の情報も彼女等によってもたらされた。

とはいえ、名称や目的以外の情報はなく、此処ここにいるメンバー以外には伏せふざるを得ない部分もあった。それが開示されれば、ゼーナは未曾有みぞうの混乱おちいに陥る危険性があるからだ。

ツバキが地球で告げられた、〈カタストロ〉は〈ジエネレーター〉の『終わらせてほしい』と願う、強い『希望』を叶えるために現れているという言葉。

タオエンは、〈ブレケース〉は何かを願う、強い『絶望』によって現れると言った。

これらが真実であるなら、〈ジエネレーター〉の『終わらせてほしい』という願いは、すでに希望から絶望へと転化した事になる。

それは、あまりに悲しい事だ。

そして、これを事実として公表すれば、どれだけの事態になるかは想像もしたくない。なまじ予想がつくだけに。

「その場合、その〈ブレケース〉っていうのは、どうするんですか？ 目標達成が困難になったら、玉碎覚悟たまくだいごとか……？」

戸惑いがちに訊ねたのはクラウ・P・ブランだ。

長い黒髪に白いメッシュ、真紅の瞳。スタイルも良く、パンキッシュなビジュアルなため

誤解されがちだが、本人は至って穏やかな読書好きである。

こう見えてやみひめと同じ小学六年生で、ぱっと見は高校生くらいに見える容姿をコンプレックスに感じていたり、ナイーブなところも多い。

やみひめやアサトと同じく、クラウも地球から来たメンバーなので、状況は理解していても、やはり実際に相対してない敵の事はイメージしにくいのだろう。それでも、自分の中にある常識に照らし合わせて、〈ブレケース〉の行動を予想した。

「いえ、彼等が〈カタストロ〉に比べ厄介なのは、捌め手を使う点です」

「目的達成のために、戦力を現地調達したりね。その世界で一番強力な武器や兵器を奪ったり、凶暴な生物を暴れさせたり、人間同士の不信感を煽ったり——色々」

〈エグゼキューター〉の姉妹の言葉に、その場にいる全員が言葉をなくす。

「あくまで抑止力だった大量破壊兵器を乗っ取られて、何もかも吹き飛ばされた国もあつたよ」

「私達が立ち寄った世界での事です。彼等が惹かれるほどの絶望を抱えた者が願うのは、結局のところ破滅です。自分だけでなく、世界のすべてを巻き込めるのであれば、願った本人にしてみれば本望でしょう」

普段から淡々としているタオエンだけでなく、常に陽気なベアトリーチェまで神妙な雰囲気になれば、誇張や大袈裟な表現が含まれているとは考えにくい。場の沈黙が更に重くなる。

「……じゃあ、ゼーナで一番強力な武器って？ 機獣はもう、いないんだよね？」

当然の疑問を真っ先に挙げたのは、やみひめだ。気転を利かせたというより、単純に重たい空気に耐えかねたのだろう。

「はい。すべての〈機獣〉はコアを抜かれて、機体はすべて廃棄されたと聞きます。〈シエネレーター〉やMBデバイスの動力源として使われていますが、コアだけでは兵器として機能しません」

やみひめの疑問にツバキが答えた。発電システムに使えるほどの出力であれば、爆弾としても転用が可能だが、それは言わないでおいた。恐らく、技術者であるロゼットを始め、数名はその可能性に行き着いただろうが、誰も口にはしなかった。

「となると、やつぱりあれか？ この星でもっとも強力な戦力となると……」

「恐らく、たちはな橘さんの考えている通りだと思います」

「え？ ……………あつ」

神妙な表情のアサトとツバキを順に見て、やみひめは彼等が言わんとする事に気付いたようだ。

「……私の時みたいにな、意識を奪って——」

クラウは地球で、(カタストロフ)に意識を奪われていた経験がある。そして、人を傷付け、友人を手にかけた。それらは世界改変でなかった事になったが、この場にいる地球からの来訪者は覚えている。クラウ自身も含めて。

「——？」

自分がした事、誰かが同じ目に遭う事を想像して、沈みそうになっていたクラウは、ぽんと頭に手を置かれ、その誰かに視線を向けた。

ロゼットだ。当事者でないため彼女は現場を見ていないが、それでもクラウの気持ちを慮おもんばかって、元気づけようと思ったのだろう。クラウは小学六年生とは思えない容姿なので、そこまで身長差はないため、ロゼットはやや撫なでにくそうだが、それが逆に微笑ほほえましくも見える光景だった。

「えーっと……これは本来、絶対に口外しちゃいけない機密事項なんだけど」

恥じらしい表情で、違う意味で俯うつむいてしまったクラウに微笑んだロゼットが、そう前置きをして続けた。

「機体にコアを搭載したままで封印されている機獣は……存在するんだ」

ロゼットの発言に場が沈黙する。

先ほどのような重たいものではなく、戸惑いに近いだろう。異邦人達もゼヘナの人間も、知識としてしか機獣を知らない。故に、その存在がどれほどの威力を秘めているのか想像しにくいのだ。

「……それって、場所は封鎖区域だったりする？」

「そう。そういう噂くらいは聞いた事があるでしょ？」

「ただのよくある都市伝説だと思っていました……」

カナコの問いをロゼットは肯定した。ツバキのリアクションを見る限り、少なくとも東方大陸の人間ならば、噂レベルでなら知っている事らしい。火のない所に煙は立たず、人の口に戸は立てられないという事だろう。

「(エリアD)って呼ばれてね、その封印システムのメンテナンスが、代々『ロゼット・コダール』が引き継ぐ仕事の一つなんだ」

「なら、あなたは——」

「ロゼット。次に『あなた』って言ったら、『お姉ちゃん』って呼んでもらおうかな」

「……ロゼットは、其処そこに封印されてる機獣を見たのか？」

「そんなに『お姉ちゃん』って嫌？」

不満そうな顔をするロゼットだが、さすがにアサトをからかって場を和ませている場合ではないと判断したのか、話を進めた。

「残念ながら、見てはいないんだ。メンテするのに、封印を解除する必要はないからね」

それはつまり、中身がどういいう状況か確認する事すら危険か、それだけの用心が必要なら存在だという事か。

「ただ、システムの大きさから考えて、大型なのは間違いないと思う。単純な破壊力だけで言うなら、機獣はサイズが大きいほど強力になるから、それが〈ブレケース〉に乗っ取られて暴れたらつていうのは……考えたくないよね」

ロゼットは出来るだけ軽い調子で言ったつもりなのだろうが、あまり効果はなかったらしく、誰もが黙り込む。

この場にいる誰も、機獣を実際に見た事はない。機獣の脅威をリアルに想像出来ないからこそ、今のロゼットの話聞き、想像も出来ない規模の脅威なのではないかと考えてしまっ。

「どうして、そんな危険な機獣が、コアを抜かずに封印なんてされてるの？」

「抜かなかったんじゃないかと、抜けなかったらしいよ」

思いつくであろう当然の疑問を挙げたベアトリーチェに、ロゼットが答えた。

「詳しい事は判らないけど、特殊な機獣なんだろうね」

「なんにせよ——〈ブレケース〉の撤退が次の段階のための布石なんだとすれば、その〈エリアD〉の守りを固めるべきね。ロゼット、あなたから上層部に伝えてもらえら？」

「もちろん。というか、私から伝えないと、機密漏洩で怒られちゃうよ」

カナコの提案を、ロゼットは朗らかに承諾した。明らかに『怒られちゃう』では済まないと思うのだが、彼女の様子を見ると、ひよっとしたら済んでしまうのではないかと誰もが思ってしまった。● ● ●

やりきれないといった表情のツバキとカナコの様子を見守りつつ、昨日の談話室での会話を思い返し、アサトはそっと嘆息した。

地球から転移現象で別の惑星に跳はされ、もう見る事はないと思っていた姿となったクラウと機獣少女達の戦闘を見届け、よく判らない敵の脅威が更に上がる可能性を示唆された。

何もかもがありえない。

少なくとも、地球での経験で免疫めんえきがついていなければ、まともではいられなかったかもしれない。

(……どうだろうな。ひよっとしたら、それでも、どうでもよかったかもしれない)

定義にもよるが、自分がまともである自信はない。そうありたいとも思っていない。

妹が失踪した事自体もショックだったが、それによる落胆はもつと大きかった。

世の中はこうも理不尽なものなのだと思ってしまった。

そして、それは別の星でも同じだった。

カナコが言っていた『上層部』——すなわち、この大陸の中央政府は、ロゼットの報告を杞憂きゆうだと取り合わなかったのだ。

東方大陸は地方分権制で、各シティごとに自治権が認められているらしい。それでも最低限、国としての体裁は取られており、法律や通貨単位などは共通で、シティ間の行き来や貿易は制限されていない。現在のような非常時には各シティの代表者が集まり、中央政府が対応に当たる事になっているそうだ。

しかし、現状の対応に追われている中央政府のお歴々れきれきは事なかれ主義が強く、〈ブレケース〉の撤退は〈ジェネレーター〉の防衛に成功した自分達の勝利と判断した——いや、したいのだ。戦争が歴史上の出来事ではなく、〈カタストロム〉も実質的な脅威ではない日々を生きてきた彼等にとって、〈ブレケース〉の襲来はショックが大きすぎた。このストレスから解放されたい。非常事態を一刻も早く終わらせたい。だから、もう終わったのだと思いたい。

それは責任放棄で、国の行末ゆくすえを預かる者達が思考停止をする事は許されない。
理屈の上では。

「上層部の人達を責めるつもりはありません。誰だって、こんな状況で責任を負う立場になれば、投げ出したくなると思います。けど——」

ツバキは優しい少女だ。相手の立場になって考え、責める事はしない。そして、それで不利益を被こうむる者を、仕方ないと割り切る事も出来ない。

「ベアトリーチェさんとタオエンさんは部外者なんです。そのお二人に、こんな危険な事を頼んで……」

「そうね……本当に情けない話だわ」

続く言葉が出ないツバキを労いたわるように、カナコはそっと彼女を抱き締める。恐らく、カナコも同じ気持ちで、かけるべき言葉を持っていないのだと思う。

上層部は動かない。(エリアD)に封印されている機獣が狙われるかもしれないと判って

いて。

ロゼット経由で伝えた話は、あくまで可能性にすぎず、仮に現実になったとしても、また退けられる——上層部はそう考えているのだろう。

〈ブレイクス〉との緒戦で五十名以上の重傷者が〈機獣少女〉に出て、四基の〈シエネレーター〉を失ったにも関わらず、それでも。

そんな状況で、封鎖区域〈エリアD〉に向かうと申し出たのがベアトリーチェとタオエン——フアフロウ姉妹だった。封印施設まで行き、〈ブレイクス〉の気配があれば報告すると言って。

最善は封印施設に十分な守備隊を置き、撤退した〈ブレイクス〉を随時掃討する事だが、早期発見が出来れば、さすがに上層部も重い腰を上げるだろう。上手くすれば封印施設を破壊される前に対処も可能かもしれない。

フアフロウ姉妹の申し出は、かなりありがたい提案だった。

〈機獣少女〉であるツバキとカナコは、勝手には動けない。遊撃という名目で自由に動いているが、それも緊急の呼び出しに対応可能な範囲に限られる。それ以前に、〈エリアD〉は封鎖区域——特別な許可がなければ立ち入る事は禁止されているのだ。

だからこそ、し・が・ら・み・の・な・い・自・分・達・が・行・く。そう言ってフアフロウ姉妹が出立したが、ほんの少し前。彼女等を見送ってから、アサト達は街に来ていた。

昨日からドタバタの連続だ。別の星に跳ばされ、其処でツバキやフアフロウ姉妹と再会し、大変な状況で、武装した少女達が戦うアニメのような光景を目の当たりにし、更に状況が悪化しかねないにも関わらず、国を守るべき立場にいる人間達は何もしない……。

気が滅入る。

アサトは手持ち無沙汰なため、手が空いているツバキとカナコに街を案内してもらおう事は決まっていたが、正直、そんな気分ではない。それでもこうして予定通りに街にいるのは、やはりアサトには何も出来ず、〈ブレイクス〉の攻撃が止んだ今、待機シフトから外れているツバキとカナコもまた同じなので、それならば——というだけの結果である。

もつとも、ツバキも呑気に街の案内をする気分にはなれないようで、カナコもアサトと同様、彼女の様子に心を痛めていた。

周囲はそこそこ通行人で賑わっている。

誰も知らないのだ。世界を破壊させる時限爆弾があつて、タイマーが動き始めているかもしれない事を。

改めてアサトは思う。知らない方が幸せに生きられる。

現実も真実もロクなものではない。

ただ――

「……………」

目の前でつらそうにしている少女がいる。

世界規模の事は偉い人達がなんとかしてくれる。しかし結局、個人の事は同じ個人でなんとかするしかない。人間なんて勝手な生き物で、それが社会を形成する事自体、土台無理な話なのだ。なら、誰かが全体のために犠牲になるなど馬鹿馬鹿しい。それを美談にするなど気持ちが悪い。自己犠牲なんてのは物、語だから涙を誘う。『一人は皆のために』はあっても『皆は一人のために』なんて嘘だ。

ならせめて、誰か一人くらい、別の誰かのためだけに勝手をしても許されていいはずだ。

「――ツバキ」

「……………」

「行くか、封鎖区域」

アサトの言葉に、ツバキがきよとんとする。何を言われたのか判らないといった様子だ。

「橘さん、何を――」

「こうしても仕方ない。いいんじゃないか？ ツバキがそうしたいなら。ツバキは充分に戦ったんだろ？ もし、それでも居場所がなくなったら、地球に来ればいい」

タオエン曰く、地球に繋がる『門』は今は開けないらしい。しかし、タオエンが『門』を開けるなら、繋ぐ方法を探せばいい。地球でゼヘナへの『門』を開いた時は、紅い世界の影響で繋がりやすくなっていると聞いていた。なら、もう一度紅い世界を再現出来れば、理屈の上では『門』を地球と繋げられるはずだ。

それが出来なければ、ツバキと一緒にゼヘナに居場所を探すのもいい。

「なんの保証も案もないが。」

「もつとも、地球だってロクなもんじゃないけどな」

十八年、日本という平和で豊かな国に生きてきた。特に不満こそなかったが、取り立てて素晴らしい国とも思えなかった。なまじ日本と似ている分、東方大陸もそう変わらない気がしたが、やはり人間の本质は何処でも変わらない。

ならば、何処に住もうが変わらないし、何処に住もうが同じだろう。

「――私も、一緒に連れて行ってもらえますか？」

答えたのはツバキでなく――カナコだった。

「カナコさんまで、何を――」

「ツバキと一緒なら、地球に行くのもいいかもしれない。そう思っただけよ」

カナコによって言葉を遮られたツバキは、アサトとカナコの間で視線を彷徨わせる。

珍しくおろおろしているツバキの様子を見て、アサトは内心で苦笑しつつ、カナコの意図を押し量ろうとする。先ほどの言葉は本心なのか。それとも、ツバキの背中を押すための方便だったのか。

が、思いのほかツバキの決断は早かった。

「橘さん、カナコさん、私は——」



ロゼット・コダールは高名な技術者である。

それは彼女が、(L. C. ファクトリー) 創始者である『ロゼット・コダール』の名を襲名している事からも明らかだ。

「ふむ、こうなってるんだ……なるほどねえ」

「……………ん」

貴重品を扱うように、ロゼットの手が少女の表面部分を撫でていく。壊れ物を扱うように、優しく、丹念に。

その仕草は繊細で、しかし手慣れている。見た目はほわっとしたお姉さんだが、やはり一流の技術者なのだ。その光景を見つめているやみひめは感じた。

「この尻尾は姿勢安定用のテール・スタビライザーか。多関節で造りも頑丈だから、意表を突いた攻撃にも使えそうだね」

「ふあ……………」

ロゼットの手がクラウの尻尾——正確に言えば展開したMBジャケットの装備——に触れると、クラウはどこか悩まし気な吐息を漏らした。

昨日のMBデバイス起動試験において、クラウは正式に(機獣少女) となった。(ジェノクラウエ) と呼ばれていた機獣のコアの欠片が納められたMBデバイスには、新たに(ラインハイト) の名が与えられた。そして現在、クラウは変化したMBジャケットの解析中で、やみひめはその作業に同行していたのだが——

(なんか……………えっちい)

ロゼットがクラウの装備を解析している光景を間近で見ているやみひめは、そう感じた。見てはいけないものを見てしまっているようで、しかし目が離せない。

「どうしたの、クラウ? 装備にしか触ってないのに」

解析作業が始まってから、クラウが妙にもじもじしており、時折、艶っぽい吐息を漏らしているのはロゼットも気付いていたようだ。膝立ちの姿勢から、不思議そうに少女の顔を見上げている。

「……ロゼットに触れられてると思うと、なんだか少し恥ずかしくなって、感覚なんてないはずなのに、直接触れられてるような気持ちになって、それで——」

「そっかそっか。クラウは恥ずかしがり屋さんな上に、敏感なんだね」

恥ずかしそうに、それでも思った事をなんとか言語化しようとするクラウに、ロゼットは優しく言った。

この二人は不思議な関係だと、やみひめは思う。

クラウはやみひめと同じ地球人で、ロゼットは惑星ゼヘナの住人。二人は接点のない他人で、出会ったばかりにも関わらず、そんな感じがまるでしない。クラウは少しぎこちないが、それも数年ぶりに再会して照れているといった印象に近い。

そう。数年ぶりに再会した娘と母親のようなのだ。

クラウは小学六年生とは思えないほど早熟で、逆にロゼットは三十二歳とは思えない容姿なので、一見すると似てない姉妹の方が適切なはずなのだが——二人の様子を見ていると、親子という表現の方がしっくりくる。

それだけに、とても微笑ましい反面、この解析作業の光景は、余計にいけないのではないのかと思うやみひめだった。

「——よし。だいたい、こんなものかな」

クラウの装備を撫で回していた——あくまで解析だが——ロゼットが言うと、ある種の羞恥プレイから解放されたクラウは、ぺたんと床に座った。完全に脱力しきっている様子だ。

「……おつかれさま、クラウ」

「やみひめ、私——」

「うん。何も言わなくていいよ」

「……なんだろう。その気遣いが、逆に痛いよ」

何か大切なものを失ってしまったようなクラウに、やみひめは優しさのつもりで言ったのだが、むしろ傷口を抉ってしまったようだ。

「やっぱり、見た目以上に機能が向上してる。ほぼ別物になってる部分もあるし……技術者としては安易に使いたくないんだけど、これは強化というより進化だね」

自ら綴った解析結果の走り書きを読み返していたロゼットは、驚きと好奇心がない交ぜになった表情を浮かべている。

「MBジャケットって、デザインや機能が勝手に変わるものなの？」

プロセツト
「初期設定でも装着者の体形に応じて変わるし、デザインのカスタマイズも、ある程度なら任意に変えられるよ」

ロゼットの回答を聞き、やみひめはツバキのMBデバイス（カグツチ）を使った時の事を思い返す。その際、MBジャケットは体形の違い——主に胸——があるにも関わらずフィットしたし、色もツバキの場合は赤だが、やみひめの時は黒が基調となっていた。

「機能も装着者に合わせて出力が調整される。だから、MBジャケットが変化するのは驚くような事じゃないんだけど……」

しばし黙考。

「まるでラインハイトが、クラウドに合わせてMBジャケットを最適化させたみたいだ。

その結果、見た目以上に、とんでもない機能向上が成された。言わば自己進化だね」

機獣の神秘だ。まだまだ知らない事がある。感慨深そうに言うロゼットは、技術者というより無邪気な子供のよう^{ほほえ}で微笑ましい。

「ラインハイト」が私のために……」

「ただまあ、このスペックをフルに使う状況には、なってほしくないけどね」

改めて自分の装備に視線を走らせるクラウドを見つめ、ロゼットは少しだけ真剣な表情を浮かべる。

〈プレケース〉が各地で撤退を始めた。ならばもう、クラウドが〈ラインハイト〉で全力を出す事はない。そんな機会があるとすれば——

「ベアトリーチェ達が言っていたような事に、ならないといけれど……」

「うん……」

やみひめとクラウドの表情が曇る^{くも}。

ロゼットを通して、ファフロウ姉妹から告げられた可能性は、中央政府に伝えられた。

この非常時に、本来は踏まねばならない手続きをすつ飛ばして、上層部に意見具申^{ぐしん}が出来た彼女は、やはりそれだけの人物なのだ。

しかし期待した対応は取られず、やむなくファフロウ姉妹の申し出に頼る結果となってしまう。正規の〈機獣少女〉であるツバキとカナコは同行出来^{でき}ず、クラウドは未知のMBジャケットの解析がある。やみひめはメンタルの面での不安があるため、アサトが行かせなかった。まだ地球での世界改変のショックが残っているのだ。非戦闘員であるアサトの同行は危険が大きく、彼と離れられないやみひめも待機となった。

「——ほら、そんな顔しないの」

無言になってしまった少女二人に、ロゼットが真剣な表情を崩して言う。恐らくだが、

二人の表情を曇らせた事に責任を感じているのかもしれない。

「今は最悪の状況に備えないと。そのためにクラウドには残ってもらったんだから」

最悪の状況——すなわち、封鎖区域に封印されている機獣が〈ブレケース〉によって解放された場合だ。記録にも、誰の記憶にもない、未知の脅威であるなら、それは最悪のレベルを考慮すべきだろう。

であれば、〈ラインハイト〉のスペックを完全に把握しておく必要がある。

そして、規格外のMBデバイスを持つ者が、この場にもう一人いる。

「じゃあ次は——やみ子ちゃんの番だよ」

やみひめの持つ〈ヤタガラス〉もまた、〈ラインハイト〉と同じく未知を秘めている。それは昨日の起動試験を見れば明らかだろう。

「……………」

なぜだろう。満面の笑みなのだが、ロゼットの迫力にやみひめは気圧けおされていた。

「がんばって、やみひめ」

声援エールを送ってくれる友人の優しさの裏に、『次はお前が辱はずかしめを受ける番だ』という本音があるような気がしてならない。友人を疑った自分を叱しかるやみひめは、国語の授業で読んだ『走れメロス』に登場するセリマンティウスのような気持ちになっていた。



〈L. C. ファクトリー〉にて、ロゼットが〈ラインハイト〉と〈ヤタガラス〉の解析を行っている頃、ファフロウ姉妹は移動用のホバー走行式のカーゴトレーラー内にいた。

「……………」

「？ タオ姉、どうしたの？」

普段通りの無表情なのだが、妹であるベアトリーチェには違いが判るのか、姉たずに訊ねた。

「いえ、とても美味しい場面を見逃してしまったような気がしたので」

どうやらタオエンは、何かを受信してしまっていたらしい。

「こつちも面白い事になってるけどね」

ベアトリーチェの視線の先には、三人の女性の姿がある。

「確かに、こちらも非常に美味しい光景です……………！」

「そういう意味じゃないんだけどなあ……………」

呆れ顔の妹も可愛らしいと思いつつ、タオエンは眼前の三人に焦点しょうてんを合わせる。

こちらに背を向けているうちの一人は、小柄な少女だ。ぱつと見の印象は、ベアトリーチ

エより年上だが、それは落ち着きのある雰囲気によるもので、実際には同じくらいかもしれない。恐らく十四、五歳だろう。

蒼いショートヘアと、きりつとした黄色の瞳。小柄な体格と同じく色々と控えめだが、可愛らしい顔つきとも相まって、大人びた雰囲気が良い意味でギャップを醸し出している。と、タオエンは分析していた。

「……尊い」

「——ツ!」

背中越しにタオエンの視線を感じたのか、蒼い髪の少女がびくりと震え、首だけで彼女を振り返った。

こちらを振り返った少女に満面の笑みを浮かべると、彼女は怪訝そうな表情のまま、タオエンから視線を正面に戻した。

続けて、もう一人こちらに背を向けている少女に視線を移す。タオエンやカナコに比べるとやや長身で、メリハリのあるスタイルと、余裕のある表情から、ともすると二十代にも見える。

紅いロングヘアと、見る者を魅了する桃色の瞳。長身で豊満なスタイルに加え、妖艶な雰囲気を纏っており、しかし色香に惹かれて近付けば、獐猛な牙を突き立てられそうな隙のなさも感じられる。

と、同じくタオエンは分析した。

「嗚呼。あの花を愛でられるなら、喜んで棘に刺されます……!」

「——?」

やはりタオエンの視線には熱量か質量でもあるのか、紅い髪の少女も振り返った。蒼い髪の少女と違ったのは、きよんとしていた表情を、タオエンに合わせて笑みに変えた点だろう。そのまま優雅な所作で前を向く。

何もかもが美しかった。

まるでタイプの違う二人の少女に息を荒くする自分を、妹が微妙に冷めた表情で見ているのだが、タオエンはそれどころではないらしい。

この二人はカナコが呼んだ応援で、どちらも〈機獣少女〉である。

蒼い髪の小柄な少女がアイナ・ボグマン。

またの名を〈師子王〉。

紅い髪の妖艶な少女がルイゼ・ルンシュテッド。

またの名を〈竜帝〉。

実績と人気を兼ね備えた証である『二つ名持ち』である事から、その実力は推して知る

べしだが、彼女等は更に特別な権限を与えられている。

有事の際の独自裁量が認められているのだ。

武力を持つ個人に与えるには危険な権限だが、永らくぜへナに有事と呼べる状況はなかったため、行使される事はないと思われていた。

ツバキがその存在に思い至り、面識のあったカナコから協力要請をし、こうしてフアフアウ姉妹と封鎖区域へ同行する運びとなったのだった。

ちなみに、この移動に使用しているホバーカーゴトレーラーはルイゼの——正確には彼女の家のだが——私物である。

そして——もう一人。

「……………」

少し離れたタオエンとベアトリーチェの位置からは、背中しか見えないアイナとルイゼ、この二人と相対している……というか、正座をさせられている三人目の少女がいる。

背中を丸め俯うつむき気味なのは、反省しているというより、単純に正座そのものがつらいのだろう。二つ名持ち二人に睨にらまれている緊張感も、もちろんあるにはあるだろうが。

「……アイナ、もういいんじゃないやありませんの？ 見ているこちらが、つらくなってきましたわ」

「意外と甘いな、ルイゼ。私とてこんな事はしたくないが、これも年長者の務めだ。言うて判らぬ者には、拳を振り上げる事も必要だ」

「ふふふ。子猫ちゃんは後輩思いですわね」

「黙れ、蜥蜴女とかげ」

振動の少ないホバーでも、皆無かいむではない。すでに痺しびれきった両脚は、わずかな揺れでも正座中の少女を苛さいなむ。やや脂汗を浮かべる様子を見るに、アイナとルイゼの会話も耳に届いていないだろう。

「……まったく。正座を崩しても構わんぞ」

「っー」

アイナの許可が下り、少女が正座を崩そうとするのだが、すでに自力ではどうにもならない段階に至っていたらしく、上半身を右に倒し、痺れが治まるのを持ち、ゆっくりと両脚を伸ばしていく。

はつきり言って不格好だ。

この様子を動画に撮られて公開でもされれば、普通に笑いにされるだろう。

「立てまして？」

見かねたルイゼが声をかけるが、少女はぶるぶると首を振るだけ。声を出す余裕はない

らしい。

「アイナさん、さすがに可愛そうですね」

「ていうか、セイザってなんですか？ 脚が痛くなるに決まってるじゃない」

タオエンと並んでアイナ達の傍まで来たベアトリーチェが、屈んで少女の脛をちよんと突いた。

「——ッ!？」

声にならない呻きを漏らし、少女が悶絶する。

「あ……そんなに痛いんだ」

「悪魔ですか、アナタ……」

悪気はなかったであろうベアトリーチェに、ルイゼは驚愕の表情を浮かべた。東方大陸の住人であれば、正座による痛みは普通に知っているものなのだろう。

「……………なんて事するのよ!?! 殺すわよ!?!」

ようやく痺れから解放された少女が、ものすごい剣幕で言った。

明るい茶色のロングヘアは乱れ、切れ長の薄い緑色の瞳はツリ上がり、元が美人だけに、その表情は怒りでより凄惨さが増している。

「ごめんね」

「……………素直に謝るなら、別にいいけど——」

ベアトリーチェの殊勝な態度が意外だったのか、少女はあっさりとクールダウンした。むしろ、怒りの矛先を向ける相手を失って、どうしていいか判らなくなったのかもしれない。

「誰にでも過ちはある。それを許せる度量があるのなら、お前もいつか本当の二つ名を得られるだろう——今は自称の〈ゲイ・ボルグ〉でも」

「失礼ですわよ、アイナ。自称や二つ名でも、名前を間違えるだなんて。ねえ、〈ゲイ・ジヤルグ〉さん？」

「——〈グングニル〉よッ!? ……あ、いや……です——」

正座を強いられ、不格好な姿を見られ、更に二つ名を間違えられた少女。彼女はホバーカーゴトレーラーに密航していたキリエ・ソウマだった。

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十四話をお届け致します。

掲載出来て本当によかった……引越しの準備というか、その前段階の新居選びや引越し業者の選定などが本当に面倒かつ精神を消耗するので、ヤバかったです。

まあ、どうでもいい事ですね。

今回も地味ですが、ちよつとずつ物語が展開します。

でもそんなのは問題じゃなく、ただただキャラを書いているのが楽しいです。

特にクラウとロゼットの絡みを書いていると、優しい気持ちになれます。ロゼット視点になって、あるはずのない母性が目覚めそうになります。母性覚醒！『ジュウオウジャー』はもう終わりましたね、はい)

今回は新キャラが二人登場しております。と言つても、過去作からのスターシステムですので、ご存じの方もいらっしゃるかもしれません。知らない方はまささらな気持ちでお楽しみください。

それでは謝辞で締めたいと思います。

今回もクラウやロゼットに関するチェックをお願いしている紙白さんに感謝を。ZAO

D『おつかれさまでした！ 行けるものなら行きたかった……！』

そして、『ここまで読んでくださった』あなた』に感謝を。

『推し』が一人でも見つかれば、書き手としては本望です。

2017 / 5 / 11 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る